



一貫コース通信

数奇な運命を生きた会津の巨星

東京大学の象徴の一つに安田講堂がある。財界人安田善次郎氏が寄贈したこの建築物のすぐ後に聳えるのが、理学部物理学科教室の建物である。2階にはノーベル賞受賞者の小柴先生の記念講堂が在るが、2つの建物に挟まる様に鎮座する胸像が今回の主人公である。銅像には山川健次郎の刻銘が在り、今も凛として理学部棟を正視する。彼は1854年に会津若松に生を受けた。9歳にして会津藩学日新館に入学、慶應元年には一等に昇級する。翌年から沼間守一にフランス語を学んだと言う。この歳に勃発した戊辰戦争では忠誠心にかられ、鶴ヶ城に籠城。善戦及ばず、結局の所、生の会津の敗北を実体験する一人になった。若松開城後は、猪苗代に謹慎するが、越後に脱走を図る。以後、経緯は兎も角、会津藩士“秋月悌次郎”の執り成しで、後に“佐賀の乱”で散る事になる“前原一誠(松下村塾生)”・“奥平謙輔”の書生となった。幾ら秋月先生仲介とは言え、直前の戊辰戦争の仇敵(長州人)に師事した事すら、普通では考えられない事である。実はこれが、前原を介し“吉田松陰”の教えに触れる機会になった。

間もなく上京、兄、山川浩の奨めもあり、アメリカへの留学の機会に恵まれる。この時に、薩摩の“黒田清隆”の薫陶を受け、アメリカではエール大学に進学、数学・物理の必要性を身近に感じ物理を専攻する。何故なら会津戦争の敗因を、漢学・道徳に偏った日新館の教育では、結局のところ理学を軽視、薩摩・長州に比較し武器の進化の遅れを生んだと思ったからである。刻苦勉励する事3年、理学の学位を受けた。1875年22歳で帰国、東京開成学校教授補となり、2年後には東京大学理学部教授になった。以後、教育に尽力し、理学博士の学位を得るのだが、この間の愛弟子には田中館愛橘・長岡半太郎(日本に於ける、世界的な、当時の原子モデルの考案者)等が名を連ねる。40歳で東京大学理科大学長となり、46歳にして東京帝国大学総長となった。後に、初代九州大学総長、一時、東大総長と京大総長も兼務している。



前後するが、山川健次郎少年は会津戦争の時に白虎隊員に選ばれていた。しかし、脆弱な体躯が作戦に耐えられない為、外されたのである。結果として飯盛山の惨事から逃れたが、反面、鶴ヶ城で観た惨状(…と、敗者が辿る運命の悲惨さ)は一生忘れなかった。教育の普及、中でも理学の普及に尽力し、東京物理学校(現在の東京理科大学)の創設にも援助を惜しまず、深く関わっている。また、妹の山川咲子(後の大山巖の妻大山捨松)は岩倉具視と共に、日本人初の5名の女子留学生(この中の最年少が津田梅子)の一員として渡米し、アメリカで12年間学んだ。

私は、ヒトの一生は誰のモノで在っても基本的に素晴らしいと思う。なぜなら、置かれた時・所・状況の中で精一杯生きていくと思うからである。しかし、時代に許容される人間存在の振幅を大きく超える生き方を選ぶ人が必ず存在する。山川健次郎先生は紛れもなくその一人で在るし、本県教育史に燦然と輝く巨星なのだと思うのだ。余談だが、会津大学にこそ教育学部が必要で、それが本県教育の向上に繋がると考えるのは、私だけなのだろうか？